

「見どころ」の分析から探る、 観光資源としてのオープンガーデンの持続可能性

(平成28年度学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)に採択)



社会学部
現代社会学科
土屋 薫 教授

この研究の目的は、日本におけるオープンガーデンを「持続可能な」観光資源として位置づけることにあります。

自宅の庭を無償で公開するオープンガーデンは、日本においては、主に1997年前後のガーデンングブームを端緒として各地で始められました。そして現在では、全国で公開地点が120ヶ所あまりにまで増加しています。その意味で、交流人口を創出する観光資源として、今や無視できない存在となっています。

これまでの研究では、訪問者の満足度は庭のオーナーとの情報交換によって決まることが確認されています。ただ、オーナーと訪問者との間には、庭に関する認識にギャップのあることもわかってきました。

そこでこの研究では、庭を公開しているオーナーとそれを見に来る訪問者との間に認識の上でのようなギャップがあるのか、庭の「見どころ」という視点に着目してとらえるを試みます。

ます。そして、そのギャップを埋めるためのツールを開発し、また提供すること、双方の満足度を高めるための道筋を探ります。

調査地域は千葉県流山市です。流山では、首都圏でいち早く2005年からオープンガーデンを実施しています。庭の公開にあたっては、駐車場や休憩所の確保、順路案内、ご近所への説明・お願いといったオープンガーデン一般に共通する課題が存在します。しかし今や継続性(「持続可能性」)の観点からも、流山のオープンガーデンは岐路に立っていると考えられます。そうした「先進地」としての位置づけで調査地といたしました。

具体的な手順としては、まずこれまでの研究成果に基づいて、メディア利用や情報の適正化といったコミュニケーション学の出発点から、訪問者の意識について整理します。そして次に、オーナーにヒアリング調査を実施し、同様の視点、さらに造園学および環境

情報学、GIS(地理情報システム)の立場から、オーナー側の意識について整理します。ここに、インターネット上のオープンガーデンに関する知見を加えることで、オーナーを支援し得るアプリケーション開発を目指します。このアプリケーションは、実際にオープンガーデンの場で実証実験を行うことによってその精度を高める予定です。

こうした方策を講じることで、オーナーの短期的な疲弊感を軽減するだけでなく、庭を公開し続ける意欲を支援し、オープンガーデンを持続可能な観光資源として位置づけようとするのが、この研究の目指すところです。単にガーデンングや観光といった個人のレジャー活動の分析に留まるものではなく、個人的活動が地域社会にどう還元され得るか、という点で、ライフスタイルだけでなくまちづくりに関わる研究となっています。

科学研究費補助金(学術研究助成基金助成金)が交付された研究を紹介します。